

食育シンポジウム

「地域で学ぼう食育！次代に伝えよう感謝の心！

～教育ファームで育む子どもたちの未来」開催概要

- 1 日 時 平成22年2月13日(土)
13時30分～16時40分
- 2 場 所 信州大学教育学部 北校舎201
長野市西長野6の口
- 3 主 催 関東農政局長野農政事務所
後 援 長野県、長野県教育委員会、長野市
- 4 参加者 一般消費者等 51名
- 5 内 容

講演

「全国及び長野県における
教育ファーム取組み状況報告」
(社)農山漁村文化協会
関東甲信越支部長 相沢啓一氏



報告

「教育ファーム実践報告」
飯綱町立三水第二小学校 教諭 岩波亜沙美氏

「体験から気づいたこと」
まごころ・ふれあい農園 久保田清隆氏

「地域食材をつかって給食の献立を立てる活動を通して」
塩尻市立広陵中学校 栄養教諭 杉木悦子氏

「広瀬ふるさと学園体験から」
信州大学教育学部学校教育養成課程 小田切洋輔氏

パネルディスカッション及び会場との意見交換会

「農業体験で学ぶ食・農・自然への感謝の心」
コーディネーター：鶴飼照喜氏(信州大学名誉教授)
パネリスト：岩波亜沙美氏
久保田清隆氏
杉木悦子氏
小田切洋輔氏

意見交換

久保田さんへの会場からの質問

Q：農業体験を犠牲的精神で受け入れているのは大変ではないか？

受け入れも収入源として考えたほうがよいのではないか？

A：有限会社としている以上は、働くことは全てお金にしたいという気持ちはあるが、経営が楽なら全てでも、

半分でもボランティアしていても構わない。しかし、自分も食べるに困るくらいの状態の中で、ボランティアというのもキツイので、これが収入に結びつくことがあればそうしていきたい。だからと言ってお金を貰わないとこれをやらない訳ではなく、子供たちや研修生と接することで、自分も成長させてもらっていると感じている。今の世の中お金や経済に置き換えてしまうと、すごく索漠としたものになってしまう。それでは、得られない「価値観」を頂いていると感じたり、家の農園に来る人たちも、お金や経済でなく、そこに価値観があるということが学べる。それとは相反することだが、お金の問題はすごく大事なことで、どんなにいいことをやっても、生活が成り立たないと消えてなくなってしまう。消えてなくなってしまうえば、いいことをやりたくてもできない。何らかの利益に結びつくように経営者として考えていかなければならない。



杉木さんへの会場からの質問

Q：学校給食以外での食農教育の取り組みを教えてください。

食材を選ぶのに安全性についてどうされているのか？

学校給食では何食を何人で作っているのか？

A：自分達で中3の総合的な学習で食育を取り上げました。

総合的な学習とは、「自分で課題を見つけてそれを解決しようとする学習」。

課題を解決できなくても、その過程が大事。それぞれが、フードマイレージについて調べたり、枝豆やジャガイモの育ちを調べて調理をしたり、ふるさとの食文化を研究したりして発表をおこなっている。

給食では、地域の物、県産の物、国産を使用している。

胡麻とか香辛料は輸入物、醤油の大豆は遺伝子組換えではない物を使用。

農産物を仕入れているところに調べてもらったら、県産50%になった（米は含まれない）。小麦は県産、お米は塩尻の物を使用。本物の食材を食べて、子供たちの舌を育てる。農薬をなるべく使用していない物を使い、一日に600食作っている。

調理作業は、午前中はアレルギーの子がいるので作業量が多くなり5人で行い、午後は4人で行っています。

小田切さんへの会場からの質問

Q：広瀬ふるさと学園での「むじな豆腐」とは何ですか？

会場の方からの回答

A：大豆をほとばして（水に浸して）おいて、ミキサーで砕いて（あまり細かくしない）小麦粉でつないで、団子にして茹でるか揚げるかしたもので、郷土食。

コーディネーター

カリキュラムの問題で、農水省が一生懸命「教育ファーム」を推進していて、文科省は学習指導要領を決めていて、そこが、つながりがあるかと言うと縦割り行政で簡単にいくことではないが、地域で頑張って縦割りを越えるしかないのかと考えている。それを承知の上で、農水省には頑張してほしいと思う。教育現場ではどうか。

岩波さん

子供たちと一緒に体験させていただいて、自分も楽しかった。

子供たちも、いい顔をしていた。

子供たちも教員も生きていくうえでは、農作業を体験することは大切なこと。

学校は忙しい。学校行事など、この時期だから、これをやらなければならないといったことが多い。時間の制約があり難しいところである。

コーディネーター

農業体験について教員の関心は？

岩波さん

私の今居る学校は小規模校で、学年で一人しか担任がいないので、わりと自由にやらせてもらっている。

大きな学校だと、学年会というのがあり、一学年に3～4人の担任がいると同一学年では揃えてやろうといった感じになる。

コーディネーター

（会場への問いかけで）広瀬ふるさと学園に参加した先生で学校の中で、こういう活動をするには、どんな課題があるのか？

会場からAさん（教諭）

教員の関心とか現場の教諭の思いなどが、ばらばらである（揃わない）のが実情である。

当校は、大規模校で長野市一の学校で職員数も多い。市街地でもなく山間地でもない地域である。

1・2年生は生活科という授業で何らかの栽培学習をおこなう。

3年生以上は、総合的学習となり栽培はしなくてもよい。

学年（5年生）で田んぼで稲作をやった。

地主さんと田植え、稲刈り、脱穀といったおおまかな作業をしたが、植物としての稲の学習はできなかった。

コーディネーター

30代の先生だと農業が身近なものではないことが多い。先生自身が環境教育での経験がない。

カリキュラムであるから環境とか地域とか食農教育をやらなければならない。その度に、地域の農家の力を借りなければならない。

地域の農家の方々から学校への働きかけの課題について、発言はあるか。

久保田さん

お年寄りが子供たちに農業を教えている姿は、生き生きしている。

跡取りが居なくなっているので、子供たち、孫の世代に教えているのが楽しいのではないか。

親からみたら、今の教育・競争の時代だと、農業をしているより勉強を教えてもらった方がいいのではと声が出てきそうで、大変なところにいるのではないか。

コーディネーター

（会場へ問いかけで）4人の方以外で、そういった経験などがあれば発言願う。

Bさん

長野市内でのある小学校の場合

周りが果樹園、水田で昔の環境は三水地区（飯綱町）と同じ、・・・今は8割が農家ではないという立地の小学校では、1年生で朝顔作り、2年生で大豆作り、4・5年生で稲作り、お米を作りおはぎを作る。

地元の農家の人たちが教えてくれたりする。おじいさん、おばあさん世代は余裕がある。私たちや久保田さん世代は、子育てや生活があるので非常に忙しい。

テレビでやっていたが、おじいちゃん、おばあちゃん、もしくは教員OBの

力を借りて、土曜日の自由参加ができる学校みたいな感じでできれば、食農の他に補習授業もでき、子供たちが生き生きしてきたと。OBの先生たちもやりがいを感じていたようだ。

農業だから農家の人だけではなく、消費者であり生産者であり色々な経験をしたい人、行政、教育者のすべての関わりをもつのが大事ではないかと思う。

コーディネーター

(会場へ問いかけ) OBを使うといった話は、色々なところで言われています。

学校を使った、自由参加に詳しい方はいますか？

Cさん

住んでいる地域で毎年、小中高学校、幼稚園の全部の学校回りをして、子供たちに食育活動のあり方を校長先生と対談しました。

小学校で、郷土食の勉強、伝統食の伝承、食育のあり方、朝食のとり方を子供たちと対談しながらやっています。

幼稚園では、親子で「おやき」づくりをしています。

母親には、もっとやっていただきたい。子供たちも母親に教わる方がよい。

Dさん

農村女性の方と団体の方が毎年、学校給食に「栗おこわ」を提供していただいている例がある。

団体の方が学校との調整に苦勞をしていて、たまに教育委員会が間に入っていくと邪魔かなと思う。

小学校の先生方は転校がある。イベントなどで行った後が続かない。

Eさん

食農教育の中で、子供たちとか若いお母さんたちが色々体験をして作るということも大事だけど、その奥に暮らしてきた人の歴史と暮らしてきた地域を守ってきた知恵などを、どうやって伝えるか、その上で自分たちがこれからどう地域をつくっていくかがさらに大切かと思う。

学校の先生たちが、そのような時間がないという話もあるが、放課後教室でやっている事例もある。

学校の枠にとらわれなくてやっていけるのかなと思う。

ポイントとなる人を見つけることが大切。保護者とか先生とか。

杉木さん

食と農を大切にする。

全ての子供たちが学べるところで学校がある。
義務教育の中で、こういう課程をつくっていくのが大切。
学校の中に、農園があると何かが食べられ、活動ができたり、自然の勉強をしたり、また、通学路の中に寄れる農園があれば子供たちも育つ。
こういったいろんな事を数値化しないと日本では認められない。
国の方に、数値化していただいて教育課程の中にすることが必要か。
色々なところで食育活動して、親子で楽しむ時間を大切にすると広がっていく。

久保田さん

子供たちは、畑で学び育ててもらっている。教科書を見るのとは違う。
農作業が好きな子も嫌いな子もいるが、そこから学ぶことも多い。
これからの教育の中に入れていければいいと思う。

コーディネーター

教育ファームは、学校・地域・親子、三位一体元気にさせる。

Fさん

農業をやると、小さいけど収穫、食べる喜びという見返りがある。
体験して始めてわかりました。
行政にお願い。農業体験を受け入れ、実践している人たちに支援を充実してほしい。

コーディネーター

法律は先行することは少ないのでないか。
食育基本法も皆さんが活動をしているからできたと思う。
本日は、農水省にも期待し、ディスカッションを終了する。

閉会のあいさつ

消費・安全部長

このシンポジウムで学んだこと、今日感じたことを様々なところで語り合っ
て広めていただきたい。

特に将来を担う子供たちに皆さんの思いを伝えて頂きたい。

農水省の予算のうち食育推進予算は、経営所得安定対策や来年度実施される
米戸別所得補償などのように、直接支払われるというものではなく、県、市町
村を經由して、地域の活動を支援しているものなので、国が支援しているもの
として見えにくいかもしれないが、例えば、私どもは、県内各市町村で食育推
進計画が策定され、各地域で食育や教育ファームが取り組まれるよう、積極的

に各市町村にお願いに歩くなどの地道な活動を展開している。しかし、策定市町村数は少なく、地域の意識はまだ低いと感じている。

本日、集まった皆さんの声を市町村に届け、地域からやる気を起こさせる活動が必要だ。

また、食育の推進について、農水省と文科省との連携をと言われているが、両者では、有機的な連携をするように努めており、農水省の働きかけもあり、例えば学校給食での米飯回数は、週3度を超えたところだ。